

農作物技術情報 第2号 畑作物

発行日 平成29年 4月27日
 発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
 編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
 パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ 小麦 小麦の生育は平年並となっています。減数分裂期以降の後期追肥や赤かび病防除については生育ステージを確認して適期に行いましょう。赤かび病の防除は、開花始期～盛期に必ず行いましょう。
- ◆ 大豆 排水対策を早い時期から実施して、圃場条件を整え、適期播種を行いましょう。

小麦

1 生育状況

越冬後の生育量はやや小さめでしたが、4月に入り気温が上がったことから、順調に生育しており、現在の生育ステージは概ね平年並となっています。今後は水稻などの作業で忙しくなりますが、除草剤散布や減数分裂期以降の追肥など、計画的に行いましょう。

2 病害の発生状況

雪腐病は、全体的に発生・被害とも少ない状況です。コムギ縮萎病・ムギ類萎縮病は4月上旬の調査によると全体に平年より多い発生状況となっています。気温の上昇に伴い典型的な病徴が観察されにくくなっていますが、発病程度の大きい圃場では生育の停滞が見られます。

3 今後の管理

(1) 排水対策

圃場の排水口や明渠の点検補修を行い、スムーズに排水できるようにしましょう。

(2) 雑草防除

連休中に雑草が見え始めます。圃場の中に入り、小麦をかき分けて発生を確認しましょう。茎葉処理剤を上手に使用することで、その後の作業が容易になります。

(3) 後期追肥の実施

減数分裂期以降の窒素追肥で、子実の充実とタンパク質含量の向上を図ります。

生育量や品種によって追肥の有無、時期、量が異なりますので表1を参考にしてください。

追肥の対応は、減数分裂期に生育栄養診断を行い、その結果に基づいて追肥量を判断しますが、地力を考慮し、圃場にあわせた判断が必要となります。

表1 減数分裂期における生育目標値(上限値)と追肥対応

品種		ナンプコムギ (目標値)	ゆきちから (上限値)	銀河のちから (目標値)
診断項目	草丈(cm)	55~65	55	
	有効茎数(本/m ²)	450~550*	500*	600未満*
	葉色(n-1葉のSPAD値)	36~44*	47	55以上
指標・追肥対応	目標値(上限値)を超えるとき	追肥しない	穂揃期に窒素成分で2kg/10a	穂揃期に窒素成分で2kg/10a
	目標値(上限値)の範囲内のとき	減数分裂期に窒素成分で2kg/10a	穂揃期に窒素成分で4kg/10a ※水田転換1~2年目で堆肥を施用していない場合4~6kg/10a	止葉抽出期~穂揃期に窒素成分で4kg/10a

注)*印は、追肥対応のための主要な診断項目。減数分裂期は、約半分の有効茎の止葉の葉耳が出た時期を目安とする。

(4) 赤かび病の防除

開花始期～盛期に必ず薬剤防除を行います。2回目の防除は1回目の防除から7～10日後に行います。曇雨天が続く場合には、さらに追加防除を行います。小麦の開花は出穂してから1週間程度後が目安となりますが、年によっては大きく変動します。このため、開花状況の観察をこまめに行い、適期防除に努めます。また、罹病穂の抜き取りは穂が緑色のうちに行いましょう。

表2 赤かび病抵抗性に応じた小麦奨励品種別の防除適期

品種名	赤かび病抵抗性	防除適期		
		開花期 (1回目散布)	1回目散布の 7～10日後	2回目散布の 7～10日後
ナンブコムギ 銀河のちから	中	必須	曇雨天が続く場合 追加散布	—
ゆきちから ネバリゴシ	中	必須	必須	曇雨天が続く場合追加 散布

大豆

1 圃場の選定 3作以上の連作圃場、雑草の多発圃場、排水不良圃場への作付けは避けましょう。

2 過度な連作防止

過度な連作による病害虫の蔓延、地力の低下、雑草の多発などが問題となっています。マメシクイガ、ダイズシストセンチュウ、黒根腐病などは、大豆の連作により発生リスクが高まりやすい病害虫です。大豆2作程度に対し、水稻2～3作程度が地力維持、病害虫対策の観点からバランスがよいという報告があります。堆肥の利用や輪作、水稻とのブロックローテーション等、長期的な展望を持って、計画的な土地利用に努めましょう。

3 排水対策

大豆は初期の湿害が収量に大きく影響する作物です。額縁明渠や弾丸暗渠等は播種直前ではなく圃場が乾いている時期に余裕を持って行うと、排水効果はもちろん播種前の整地作業等の準備もスムーズに進みます。

4 播種適期

播種期は、早限を出芽時に晩霜の心配のない頃、晩限を霜による強制登熟で未熟粒が多発する心配のない頃に設定します。概ね、県北部では5月中下旬、県中部では5月中旬から6月上旬、県南部では6月上中旬が播種適期となります。

5 適正な栽植密度の確保

畦間は70cm程度を標準とし、中耕培土等の中間管理や収穫に用いる機械の幅に応じて作業が効率的に行えるように設定します。品種ごとに好適な栽植密度とするためには、株間の調整が必要です。

表3 普通大豆の品種別栽植密度と播種量

項目	ユキホマレ	ナンブシロメ	リュウホウ	シュウリュウ
栽植密度(本/10a)	2万～3万	1万～1万2千	7千～1万5千	1万～1万5千
畦間×株間(cm)*	70×14～9 30×30～22	70×30～24	70×40～20	70×30～20
播種量(kg/10a)	6～9	2.5～3	2.5～5	3.5～5.3

注) *は、畦間を70cm、1株2本立てとした場合を示した。

「ユキホマレ」の麦後栽培では畦間30cm前後の狭畦密植とする。

「リュウホウ」は、播種期により栽植密度を調整する(晩播ほど密植とする)。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]
[~6月15日]

「いつもの慣れが落とし穴 急がずあせらず 農作業安全」

次号は5月25日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。